

マルク・レヴィンソン＝著 田辺希久子＝訳

# 物流の世界史

## —グローバル化の主演は、どのように「モノ」から「情報」になったのか?—

2022年2月発行  
 本体2400円＋税  
 ダイヤモンド社  
 ISBN 978-4-478-10708-9



柴崎隆一  
 SHIBASAKI, Ryuichi

東京大学大学院工学系研究科レジリエンス工学研究センター准教授

本書は、2007年に日本語版初版、2019年には増補改訂版が日経BP社より発刊され、いまなおベストセラーである『コンテナ物語～世界を変えたのは「箱」の発明だった』（原題：“THE BOX: How the Shipping Container Made the World Smaller and the World Economy Bigger-”）の著者による新著である。『コンテナ物語』は、20世紀の重要な発明の一つとされている国際海上コンテナの、主に1950年代の登場から1970年代までの世界的な普及に至るまでの様々な出来事がまとめられた、物流業界に携わる者には必読の名著として評価が定着している。コンテナが世界の物流コストをいかに革命的に引き下げ、グローバル化を引き起こしていったかが、時にディテールなストーリーを交えながら豊富な参考資料に基づいて描かれており、陸・港・海を跨いだ一貫した輸送システムとして導入されたこと、そしてある時期に（痛みを伴いながらも）規格が統一され世界中の誰もが利用可能となったことなどが強調されている。

本書の原題は“Outside the Box: How Globalization Changed from Moving Stuff to Spreading Ideas”であり、上掲書との関連がよりわかりやすい。つまり、コンテナの普及期に焦点を当てた“The BOX”に対し、コンテナの普及（その要約は本書第5章にも収録されている）以外のグローバル化にも焦点を当てた本書“Outside the Box”である。そういう意味では、『物流の世界史』という本書の邦題は、上掲書の邦題が名訳といえるのと比較するとややミスリードかもしれない（上掲書の邦題が嵌りすぎたせいかもしれない）。

実際に本書の3/4ほどは、物流の歴史というよりは、金融・為替なども含めた貿易のグローバル化の歴史に充てられており、上掲書と同様に参考資料を豊富に引用しながらそれが整理されていて、国際経済史の概観や復習に適した内容といえる。また、このパートで著者のもっとも言いたいことである「何億人もの人々が極貧状態を抜け出すことに貢献したグローバル化は、全体として世界にとって良いことであった（はじめに、p.vii）」という主張も十分伝わってくる。ただし、『コンテナ物語』に比べると扱っている事象が多岐にわたるため、歴史的なイベントを逐次追うことにページの多くを費しており、『コンテナ物語』のようなディテールの面白さを発揮するにはやや紙

幅が足りなかったかという印象を受ける。

それよりは、筆者は、後半の約1/4に記されている、まだ評価の定まっていない現在進行中のグローバリゼーションに対する著者の見解・評価の方が面白く感じられた。著者は（そして筆者も賛成であるが）、基本的にはグローバル化の流れは止められるものではないという立場であり、近年耳にすることのある「グローバル化は不平等の元凶である」といった批判は、世界がフラット化するにつれ各国政府が政策でコントロールできる余地が限定されていく難しい環境とはいえ、グローバル化された経済の現実に対応できない政府の言い訳に過ぎない（第16章、p.222）と手厳しい。また、世界の均質化に伴い、むしろ近隣諸国との貿易を拡充しブロック経済化した方が輸送コストや環境面でプラスという主張も、規模の経済を考慮すれば疑問な面もあると指摘している（第18章）。そして、出版のタイミングの問題で、コロナ禍やウクライナ紛争については（ほとんど）直接触れられていないものの、究極のグローバル化で一国にサプライチェーンを集中させることの現代的リスクを指摘（第19章）したうえで、最終章では、製造業はもはやグローバル化において以前ほど重要ではなくなった（p.280）と指摘し、第4のグローバル化においてはサービスによる付加価値が重要であり、「経済成長をもたらす最大の鍵は柔軟な技能を持つ高度に洗練された労働力であろう」（p.289）と述べている。そして、グローバル化の恩恵が、国・地域単位でなく広く個人に行き渡るかどうか重要であると指摘している。

筆者が最近世界各地を訪問する機会でも、どんな発展途上国でも首都や最大都市はそれなりに発展し、国の差はあまり感じられない一方で、そういった国の国内における（首都とその他地域、あるいは都市部と農村部の）経済レベルの差の方が大きく感じられることが多い。その究極の形態が個人間の格差であり、グローバリゼーションの功罪も、国や都市といった集計レベルでなく、個人のレベルで議論すべきという著者の意見に筆者も賛成である。そういった意味でも、原著の副題は“Spreading Idea”と人による付加価値（アイデア）に焦点が当たっているのに対し、邦訳では「情報」となっていて、人が主演という著者の主張が伝わりにくい点が少し残念である。